非日常建築

多認識領域による空間の連続

指導教員　吉松秀樹教授　印

9AEB3202　高橋　昌大

1. シェルに感じた非日常性

シェル構造が生む大空間に、非日常性を感じた。そこには壁も柱もなく、境界が存在しない。しかし、連続した空間のうちのひとつにいるような感覚を覚えた (fig.1,2)。

(fig.1)

(fig.2)

2. 空間的象徴による暗示

ロバート・ヴェンチューリは、建築的要素の分節化にとって代わる装飾は、建築それ自体を象徴とするとしている。自由曲面でできた空間は、その空間を覆う構造物自体が象徴（シンボル）として認識されているのではないか。それは空間的に作用し、そこにいる人々に流動性を暗示させている (fig.3,4)。

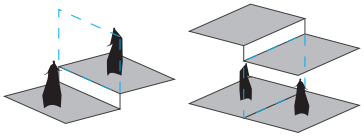
「バカルディの工場 / F. キャンデラ」に見られる暗示

柱がないため、建物全体はひとつの大空間として捉えることができる。(fig.3)。

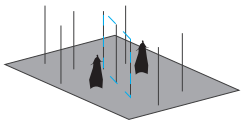
しかし、複数のシェルが相貫して出来ているため、空間が別れて感じる (fig.4)。

3. 多認識領域の発生

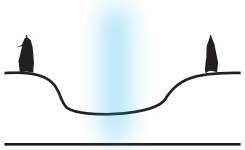
「Rolex Learning Center/SANAA」は、壁や仕切りを用いることなく高低差で空間同士をわけている。ゆるやかな曲面は建物全体を流動性のあるひとつの空間と暗示させ、連続した空間と空間の間に新た領域を生む。その領域は人々の認識の違いによって境界とも空間とも捉えさせる。しかしそれは明確な境界ではない (fig.5,6)。このような、領域を「多認識領域」と定義する (fig.7,8)。この領域の連続は建物全体に連続性を与える。



(fig.5) 段差による明確な境界

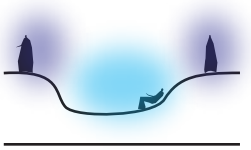


(fig.6) 柱による明確な境界



(fig.7) 曖昧な境界として

or

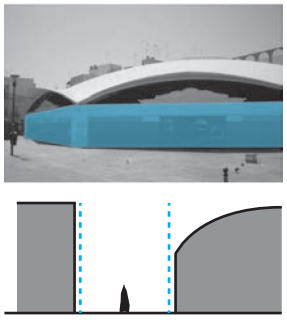


(fig.8) 境界の薄い空間として

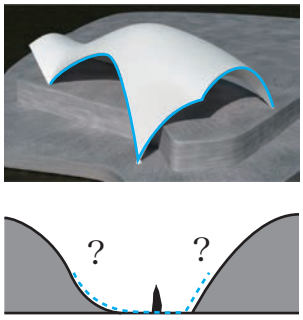
4.「多認識領域」と外部の関係性

緩やかな曲面でできた「多認識領域」は、様々なシーンと関係性を持たせ連続性をつくる。

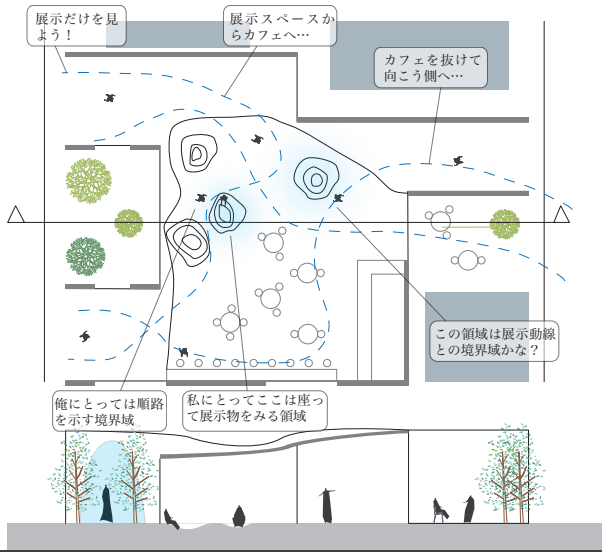
古典的なシェルはそれを支える明確な壁が存在し、周辺に溶けこんではいない。シェルが直接地面に触れるようにすることで、軽さが生まれ、外部から内部へ引き込み周辺に溶けこんでく (fig.9,10)。



地面に対し垂直に立つ壁は、外部空間からは内部を想像しづらく関係性は生まれない (fig.9)。



点支持に近いディテールは、外部からも曲面の造形を把握しやすい。これにより、外部空間との関係性が生まれる (fig.10)。

5. 都市を象徴するカフェ＋ギャラリー

今日、都市には形式化された無機的な建築が建ち並び、それぞれが看板や標識で装飾され、連続性が感じられない。結果、都市という大空間の中に連続性はうまれない。そこで、「多認識領域」をもったカフェ＋ギャラリーを提案する。外部との関係性をうみ、その関係性は内部にもつづく。連続性のある空間は無機質な都市の中で互いをつなぐ象徴となる。